

# 心の動くままに遊ぶようになるまで

## —— A との長い道のり ——

伊集院 理子

Aは、四月に四歳児クラスに入園してきた、男児である。入園の次の日から、朝はごく普通に登園してきて、親離れもスムーズにでき、園生活に移行するのだが、緊張した表情のまま、友だちが電車遊びをしているそばに座りこんで、じっとその様子を見ていたり、その場から保育室で遊んでいるまわりの子どもの様子を見ていることが多かった。時間が経過するに従って、不安が募ってくるのか、目にうっすら涙を浮

かべ目のまわりをほのかに赤くしているのに、泣きたい不安な気持を表立って表出することが出来ずに、必死に押さえこんでいる様子であった。そんなAを見ると、「Aちゃん、大丈夫？」と声をかけずにはいられなくなつて、声をかけると、無理をして目を細めて笑って見せるのだった。泣きたいならば思いっきり泣いてしまえばいいのに、そう出来ないAの不自由さを、その時私は強く感じた。

だんだん日が経つにつれて、三歳児から進級してき

た子どもたちがやりたいことを見つけ活発に遊ぶ様子に刺激を受けて、他の新入園児も自分たちで遊びを見つけて動き出していった。その中で、Aは自分からはやりたいことが見つけられず、大半の時間を担任のまわりをウロウロしながら過ごしていた。「もう、お友だちが○人来ました」「まだ、○ちゃんが来ていません」といったようなことを、担任に話しかけてきた。

みんなが揃ったとか、登園した順番とか、外枠的なことがまず気になってしまう様子であった。又、自分の好きなスポーツについての話もよくしてきたが、自身の身体を動かしてやったスポーツの話ではなく、プロサッカー、プロ野球を観戦しての話であった。

担任のまわりにつかず離れずいて、このように言語的に働きかけてはくるものの、何ら自分からは自分の身体を動かして行動を起こそうとはしないのである。

そんなAを見てみると、思考の世界と行動の世界のなはだしいギャップがAの不自由さをもたらしている

ように思えた。

\*

二学期になって、約一ヶ月がたち、今現在もAは、まだまだ心の動きのままに身体を動かすことができな  
いでいる。A自身が心を動かして、その心の動きのままに自分の身体を動かして行動を起こしていくことを積み重ねることで、自分自身の力で自分の不自由さが少しでも解放していけるように、まだまだ先が長い道のりだが、担任としては、先をあせらずに直実に支えていきたいと思っている所である。

この機会に、四月からのAの行動を思いかえし、これまでのAの変遷を見つめなおしてみたいと思っている。

### 迷子のカメラ捜し

四月の終わりに、クラスで飼っていたカメラを園庭で散歩させていた時に、子どもがふと目を離したすき

に、カメが行方不明になってしまった。私は、保育室にいて、担任してまだ間もない子どもたち一人ひとりへの対応に追われていた。子どもたちからカメがいなくなったことを知らされて分かってはいたが、すぐには保育室から離れられずにいた。

Aは、そんな私に、「早くカメを捜しに行かなくては」と盛んに働きかけてきた。Aに何度も催促され、保育室のことが気になりながら、Aや他の子どもたちと園庭に出て、一通り見失った場所の周辺を捜してみた。カメがいなくなったと聞かされた時点で、担任して間もない幼い子どもたちにカメの見張りをまかせたままにした自分の配慮のなさを嘆きつつも、カメの隠れこんでしまう場所はいくらでもある広い園庭なので、私は半ばあきらめていた。その場で必死にカメを捜すことより、保育室に戻って、他の事の対応に心をさきたいという気持ちが強かった。そこで、一通り捜して、又保育室に戻ってしまった。

Aは、カメの行方がとても気になった様子で、お帰

り前にも、「カメをもう一度捜しに行かなくては」と誘うので、「Aちゃん、先生のかわりにもう一度捜しに行ってきたくれる？」と頼むと、Aは一人で園庭にかけつけていった。一通り園庭を見回ってくれたのか、戻ってきて、「見てきましたけど、いませんでした」と報告してくれた。

次の日も、その次の日も、「カメを捜しに行きます」と言って、Aは自分から園庭に出かけていくようになった。

「何かをしにいく」という名目が立たないと動きにくかったAに、「カメを捜しにいく」という名目ができただことで、Aは、自分一人でお庭に出ていけるようになっていった。

### お化け屋敷のキップ係

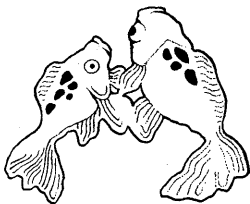
五月の半ばを過ぎた頃、保育室では、衝立や開くと「く」の字型にコーナーを区切ることが出来るままごと用の柵を使って、空間を四角く区切って、その上に

大きな黒い布をかけて、暗い空間を作って、その中でお化け屋敷ごっこが展開していた。狭い空間に数人で入りこみ、まわりのお化け屋敷やの子どもは、衝立をガタガタさせたり、「おばけ〜」と恐しそうな声色で言うといった、たわいもない遊びであったが、暗い閉空間にごちゃごちゃになって入る楽しさがあって、結構盛りあがっていた。

Aは、その様子を遠目に見ているながら、そこには近づくことが出来ないでいた。そこで、「Aちゃん、お化け屋敷のキップやさんになってくれるかなあ」と声をかけると、まんざらでもなさそうだった。紙を取ってきて、「これをキップみたいに切って、みんなに配ってみたら」と言うと、「うん」と言っていて、やりだした。こちらは、同じぐらいの大きさに小さく紙を切るというイメージだったが、Aが切ったものは、大小バラバラ、切り方は、まっすぐではなく、ヘビのように蛇行していたり、引きちぎったようになっていた。Aのはさみの使い方は、驚くほど幼く、これまでの経

験の少なさを物語っていた。切った紙に何か文字や印などを書きこむといった発想もなく、ただ白い、見ためにはとてもキップとは思えないキップが出来あがった。

Aの作ったものを、小さいカゴの中に入れて、「キップができたね」とAに話し、他の子どもたちには、「Aちゃんがお化け屋敷のキップを作ってくれたから、Aちゃんからキップをもらってから、お化け屋敷に入ってください」と声をかけ、お化け屋敷のとなりキップ売り場をつくった。キップ売り場に座ったAから、子どもたちはキップを受けとり、それからお化け屋敷に入るようになっていった。お化け屋敷やさんをやっていた子どもの中には、「僕もキップをつくりだした子どももいた



が、Aを排除するような動きはなく、Aのへなへなのキップに対しても誰一人文句を言ったりする子もいなかった。

担任としては、クラスの子どもたちの柔らかさを有難く思うとともに、Aがこういう形で他の子どもたちと一緒に活動に加わられたことをとてもうれしく思った。

次の日も、お化け屋敷が始まると、「キップの紙は？」と言って、自分からキップ系の役を買って出てくれた。

### 実習生との共依存関係

五月後半から六月に入ると、物静かで温和な感じのAに魅かれる女兒が数名出てきて、その女兒たちからの積極的なアプローチもあり、担任のまわりで過ごす時間が減ってきていた。女兒たちと一緒にいるわけではないが、Aなりにだいたい自然に幼稚園で過ごせ

るようになってきていた。

そんな様子で、六月に入って数日が過ぎた頃、実習生が二人、二週間、クラスの中に入るようになった。

一人の実習生は行動が緩慢で、表情も堅く、子どもが親しみを感じてすつと近づいていきにくいタイプで、子どもたちと関わるきっかけがなかなかつかめずにいた。そんな実習生にとっては、動きが少なく、一人で手持ち無沙汰に過ごしている時が多いAは、働きかけやすい存在であったようで、その実習生がAと関わるが多くなっていた。Aにとっても、寄り添ってくれる大人がいれば、その大人と過ごす方が、友だちの中で過ごすより楽に過ごせるわけで、Aもその実習生と過ごすことを選んだ。かくして、Aとその実習生との共依存関係が生まれていった。

実習生が入って、又、大人と過ごす時間が増えてしまったAを見て、日常の担任一人と子ども三十四人という保育状況の中で、大人に寄り添ってほしいと思っているAの思いに充分応じきれないという事実を

思い知らされたという思いと、Aが子どもたちの中で自分なりの存り方を確立していけそうになっていたのに、又逆戻りさせてしまっているのではないかという思いと、複雑な心境で、Aとその実習生との共依存関係を見守っていた。

### 箱の中に箱を詰めこむ

保育室には、自由に使える空箱が常備してあって、子どもたちは空箱を使って色々なものを作っていた。実習期間に入った頃、それまでよりも、空箱製作をする子どもたちが増えていて、Aも実習生の誘いもあつたのだろうか、空箱にむかっている時間が増えていた。Aは、少し大きめの箱の中に、それよりも小さい箱を詰め、又、さらに小さい箱を詰め、その又中に、箱を切った紙きれや、紙を小さく切ったものなどを詰めこんでいた。そして、その箱を紙の手さげ袋の中に入れて、それを持ち歩いていた。箱や紙の切り方は、相変わらず幼く、はさみで切っているのか、ちぎって

いるのか、よくわからないといった様子であった。

箱の中に箱や紙を詰めこんでいるAを見て、その行為は、Aの心の中を象徴しているように思えた。Aは、今、自分の中に色々なものを詰めこんで、自分を固めているのかもしれない、とふと思った。詰め込む行為自体に意味があると思っていながらも、イメージを持って箱や紙をつけたり描いたりしながら製作している他の子どもたちへの働きかけのレベルで、あさほかにも「何、作っているのかな？」などと働きかけたくなってしまう、口をついて出ってしまったその言葉を慌てて飲みこんだ。そして、先を急いではいけない、AはAなりに箱を箱の中に入れて、自分の中にあるものを表出しながら物をつくりだしているのではないかと、と自分自身を戒めた。

### 実習期間後のA

頼っていた大人がいなくなり、又、担任のまわりをウロウロする状態に戻ってしまうかもしれないと半ば

思いながら、きっとAは実習生が来る前の状態よりもさらに進んで、自分で動きだすのではないかと半ば確信していた。私の期待どおり、Aは何かを吹っ切ったように思えた。

四月から毎週一回、大学院の砂上さんが、私のクラスに入って、保育観察記録を取ってくれている。

実習後すぐの砂上さんの記録の中に、朝から箱の置いてあるコーナーで箱を捜しながら他の子と明るく会話しているAの姿が書きとめられている。又、園庭に一人で出ていき、園庭の真ん中でホームランを打つような動きをしてポーズをとったり、一人で園庭を走りまわっている様子も記録されている。Aは外に出ることを、自分で選択して、行動しているのである。外から見れば、同じように園庭をブラブラしているように見えても、自分で選びとって、自分なりの園庭での居方をつくりだしているという点で、名目がなければ外に出られなかった一学期の初めの頃とは、大いに違ってきている。

その後の記録の中に、担任の姿が見えなくて少し不安になっている場面もある。記録者が心配して担任を捜して、担任の居場所をAに伝えるが、Aは「もう少しここにいる」と記録者に伝えている。担任に頼るのではなく、自分の力で乗りこえることを選びとっているAがそこにいる。

## 二学期になってからのA

二学期になってから一ヶ月がたち、Aは毎日早めに元気に登園してきている。

うちの幼稚園の庭には起伏があり、子どもたちが通称「おやま」と呼んでいる高台は、長い夏休みを経て、雑草園と化し、虫の宝庫となっている。多くの子どもたちは、「おやま」での虫とりで夢中になった。Aも友だちや担任とよく「おやま」に出かけていった。Aは、自分自身の虫を捜すというよりは、あくまでも友だちの手伝いに徹している様子であった。そんなAを見て、活動の主人公、中心の位置に自分を持っ

ていくことに、まだまだ抵抗を感じるAがいることを改めて感じた。とはいっても、主人公ではなくとも、脇役であっても、友だちとの遊びに自分から関わっていいという姿がグリーンと増えてきている。

ある日のお片づけの時、Aは自分のクラスには見かけない本を見つけ、自分で本の裏を見て、「これは○の組の本です」と担任に伝えてきた。一学期のAだったら、そこまでAの動きはおしまいであったと思うが、Aは少ししてから、「届けてきます」と言っていて、その本を別のクラスまで届けにいった。たったそれだけのことであったが、Aの思考の世界と行動の世界のギャップが縮まってきていることが伝わってきて、とてもうれしく思った。

\*

Aのこれまでの軌跡を断片的に振り返ってみてきて、目立たないが、Aは直実に変わってきている。

観察記録をとってくれている砂上さんが、はじめの観察を終えての感想の中に、次のような文章を書いている。

——(略) 自由保育の幼稚園に対して「子どもを遊ばせているだけだ」というような批判がありますが、「本当に自分のやりたい遊びを見つけて遊ぶ」ことは、水が高いところから低いところへ流れるような楽なものでは決してなく、何かを自分の中に構築していくことのように思います。そのためには、遊ばないでいること(迷っていること)も含めて、遊びのための十分な時間と空間が保証されていることがとても重要





だと感じました——

はじめての観察の後にここまで言い当ててしまう彼女の鋭さに感心するとともに、三年前に卒園させた男児Kの母親の言葉を思いだした。三番目の子どもをうちの園で育てたその母親は、上の二人の子どもの時と比較しながら、卒園を目の前にした保護者会の折にこう話してくれた。

——上の二人にくらべ、幼稚園に通う道すがら、Kが一番孤独だったように思います。その日一日誰と遊ぶか、何をして遊ぶかは、全てKにまかされており、Kが決めるべきことだったからです。ここの保育は、自由でいいという面もありますが、そういうった厳しさも含まれていたと思います。そういう中で過ごせたこと、Kにとっては大変であったと思いますが、とてもよかったと思います。親としても、三人の子どもの幼稚園生活の中で、この三年間が一番学ばせてもらいました——

砂上さんも、Kの母親も、自由に遊ぶことの厳し

さ、大変さに触れている。私たちは、あえて、厳しさ、大変さも含む自由の中で、子どもたち自身でやりたいことを見つけ、それを自分なりにふくらませていくことを子どもたちに求めているわけである。Aのように、やるべき活動を呈示してもらえたら、きっとその方がずっと楽で過ごしやすいのかもしれないと思われる子どもたちもたくさんいる。子どもにとっても厳しさ、大変さを含む自由ということを肝に銘じて、先を急いで引っぱりすぎないように気をつけて、Aを支え導きながら、Aが心が動くままに行動を起こし遊べるようになるまで、Aとの道のりをゆっくりと歩んでいこうと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)